

2017年4月17日

生活協同組合パルシステム東京の皆さま、ご支援を賜りましてありがとうございます。

【事業名】

エイズの影響を受ける人びとおよびケアを必要とする子どもたちの支援強化事業

【背景】

現在南アフリカ(以下、南ア)では、人口約5500万人のうち約619万人がHIVに感染しています。これは一国の陽性者数としては世界最多です。2004年に公立の医療施設においてエイズ治療薬(ARV)が無料支給されるようになって以来、HIVに感染しながらも寿命を全うすることも可能となりつつあります。しかし現実には、貧困ゆえに、自宅に食料がなく副作用の強いARVを服薬できない、あるいは交通費がなく病院までたどり着けずに薬にアクセスできず、命を落とす人が数多く存在します。また、治療薬の普及で命が救われる一方、HIV＝死の病ではなくなったことで、国内・国際的な社会問題としてのHIVへの関心、危機感が薄れつつあるのも現状です。

HIV感染の影響を最も受けるのは若者そして子どもたちです。南ア国内だけでエイズで両親もしくは片親を亡くしたエイズ遺児は約250万人いると言われていて、多くの子どもたちは遠い親戚や知り合いの家に預けられ、時に差別の対象となり、貧しい生活を強いられるケースも多々報告されています。2015年度にはHIV陽性者を抱える家庭に育つ子どもは大きな精神的負担を受けているという調査結果も発表されました。家族の看病や介護の負担を子どもが担うこともあります。

中でも、若者はHIV感染のリスクに最も脆弱な存在です。HIV感染率が最も高い年齢層は20～35歳の若者や働き盛りの人びとです。南アの主なHIVの感染ルートは性行為ですが、「コンドームを使わない性交渉によりHIVに感染する」ことを知らない若者の割合が以前に比べ増えたという調査報告もあり、JVCが活動する地域でも、ある中高一貫校で年間(2015年)約20名の女生徒の妊娠が報告されました。同国のエイズ対策として治療に専念する一方で、以前に比べて予防啓発の頻度が低下していることも背景にあると言われていて、また、貧困ゆえに、金銭と引き換えに年長者と性行為を行うことや、女性の地位が低いという社会的背景からレイプによる妊娠・感染もあとを絶ちません。

このような中、医療機関・従事者が不足し、また正しい情報が届きにくくエイズへの差別や偏見が特に強い農村部において、地域住民自身によるHIV陽性者・エイズ遺児への支援や、特に若者に対する予防啓発活動、また彼らの生活そのものを支えるための活動など、包括的なサポートが必要とされています。

【目的・概要】

以上の背景を受けて、JVCは、南アフリカリンポポ州の貧困地域において現地CBO(Community Based Organization/母親たちが中心に活動する住民組織)と協働し、ケアボランティアたちの能力強化を通じて、地域で子どもやHIV陽性者に対するサポート体制が強化されることを目指して、2012年度下半期より活動を実施しています。活動は、家庭菜園活動、訪問介護(HIV陽性者サポート)、子ども支援、HIV感染予防啓発の活動を行う現地パートナー団体・LMCCと協働しています。また新たに、同地域にある村(フィアボム村)で、LMCCと類似の活動を行うチルンザナニとの協働を2014年4月に開始しました。

事業開始から4年目にあたる2016年度は、活動開始当初目指していた目標の一部について成果が現れ、その定着が見られたことから、①成果定着にまだ時間が必要なもの、②これまでの成果の上に新たな可能性が見えてきたものとして、以下にご報告する3つの活動を実施し、成果目標の達成と持続性の定着を目指しました。中でも、10代の若者(以下、青少年)たちを直接の対象とした活動に注力しました。

【報告】

2016年度は4月～8月にかけて、事業地において新たな行政区分に反対した住民によるストライキが発生、この間、学校や公共交通などが閉鎖され、活動村3村のうち2村で直接的な影響を受けました。子どもケア・センターと活動する2村のうち1村では、複数の学校が焼き討ちにあい、センターの活動も停止せざるを得ませんでした。8月半ばにはこれが一旦終息、活動村に少しずつはいるようになり、現在に至ります。ストライキの間は、学校の休暇期間を利用して村外のキャンプサイトで研修を実施するなど最低限の活動しか行えませんでした。9月以降ようやく村入りが可能となりましたが、南アフリカの年度末である12月に向けて、ストによる学校カリキュラムの進捗の遅れを取り戻すために、協働を予定していた学校や保護者が多忙となり、想定していたペースで活動が行えませんでした。しかし、これまでの活動で築いてきた地域内の人間関係や学んできた知識などの基盤を活かして、ケアボランティア、学校関係者、保護者、子どもなど、村の住民自身により、本事業で目指していた成果がもたらされることとなりました。

(イ) 特別な保護の必要な子どもの支援

<青少年活動のサポート、活性化>

若い世代におけるHIV感染においては、ピア・プレッシャー(自分と似た存在、例えば友人などの影響を受けて、自分の意

思が不明瞭なまま好ましくない行動をとってしまうということ)の課題の大きさと、一方で、感染予防におけるピア・エデュケーション(お互いから学び合うこと)の効果、すでに世界の様々な事例・報告で確認されています。

これを受けて、ケア・センターに通う青少年がお互いに学び合う体制を強化し、また地域内で青少年による予防啓発が行えるようになることを目指し、2016年度は活動を継続してきた2村の子どもケア・センターの青少年を対象に、HIV/エイズに関する研修、リーダーシップ研修、ライフオリエンテーション研修(子どもの権利、環境教育、キャリアパス、性感染症など十代の青少年の健全な生活に必要な課題について考えるもの)、他地域で同様の活動を行っている子どもケア・センターの青少年との経験交流などを実施しました。これらの研修では、男女わかれて「セクシュアリティ(性差・性意識など)」について学び、検討する機会なども設けました。また学んだことを活かして、ケアボランティアや青少年の自主企画で奉仕活動(託児所の改修、道普請、高齢者の手伝いなど)や HIV 予防啓発活動を行いました。

◆成果・課題と今後

10月に、当初想定していた学校で実施できない代わりに(教員がカリキュラム遅れを取り戻すために多忙だった)、村内のスポーツデーを利用してケアボランティアとセンターに通う青少年による HIV 予防啓発活動を実施しました(2回。累計で約200名が参加)。その結果、啓発活動の内容がとてもよかったことが地域内の保護者と子どもたちの関心をひき(新しくケア・センターに参加した青少年やその保護者との会話より)、本活動以降、年末年始にかけて約40名の子どもたちが新しくケア・センター通うようになりました。

またこうした予防啓発活動の機会が、青少年が過去に研修で学んだことを振り返る機会となりました。新しく参加した青少年やその他子どもたちに、研修で伝えられた情報が伝わっており、子どもたちの間で情報共有がなされていることが確認されています。

青少年らが12月の年度末試験に向けて、放課後にセンターで勉強を教え合うようになり、ケアボランティアも青少年の勉強をサポートしました。その結果、2016年度は、初めて、ケア・センターに通う青少年全員が学年末試験に合格するという大きな変化・成果が見られました。この「支え合い」がその後も定着し、日常的な活動のなかでも活かされています。ケアボランティアが不在でも自分たちで考えて、日々の活動を行うようになったり、幼少の子どもたちの世話をするようになりました。

センターに通う青少年の保護者から、子どもたちの家庭での態度変容が報告され、また実際に、センターでの行動や学校の成績が上がるなどの変化も確認されています。ケア・センターに通う子どもで妊娠した女の子が一人もいなかったことで、学校からも2017年度に学校での予防啓発を再開してほしい旨、ケアボランティアに要請が届けられています。

2017年度は、世代を超えてこうした成果が伝わり、継続していくように、子どもたち主導による活動をモニタリング、サポートしていくことや、他団体と学び合うことを通じて自分たちに自信をもち、青少年が自ら行動したり、活動を改善させていくための経験交流などを予定しています。

<青少年活動のサポート体制の強化>

ケアボランティアが青少年活動を継続的にサポートするための研修として、年齢別(10代以下・10代以上)の子どもプログラム&サポート研修、子どもの人権に関する研修、同分野で活動実績のある団体との経験交流を行いました。また、理事も対象としたガバナンス研修、地域で子どもたちをサポートしていくために村内の保護者を対象としたJourney of Life研修(JOL/自らの成長を振り返りながら子どもの成長過程(思春期など)、子どものニーズへの理解を深める研修)、保護者会などを実施しました。

◆成果、課題と今後

ストの影響により活動実施は遅れたものの、学校カリキュラムの遅れを取り戻すにあたり、学校側からケアボランティアに対し、放課後にケア・センターに通う以外の子どもの含む生徒たちが勉強するための場所や食事の提供などの協力を要請され、センターとしてそれに応え、地域一体となって子どもたちをサポートする様子が見られました。また、ボランティアたちが学校や保護者からの信頼を得ることにつながりました。試験期間の協力を通じて保護者との関係も強化され、まだ少ない事例ではあるものの、子どもの問題解決にあたって、保護者がケアボランティアに協力するケースも見られるようになりました。

実質的な活動期間が短く、JVCによるモニタリング、フォローアップが不足したなか、ケアボランティアや地域住民が自ら活動を再度活性化させ、状況を改善させる様子が確認されました。これは、これまでの活動で築いてきた地域内の関係性や学びが活かされたために可能だったと言えます。

2017年度は、2016年度に実施が不可能だった学校での啓発活動の実施を行います。教員が多い理事との活動がストの影響で一度しかできなかったことは、課題として残されています。また、2016年度に経験交流した団体が、LMCC同様の村のなかの小さな団体だったにもかかわらず(2団体)、自分たちでパンを焼いたり、自分たちで助成金の申請書を作成して活動資金を集めるなど、継続的に活動を行っていくための組織基盤の強化も行っており、この点を、交流等を通じて学んでいく予定です。

<青少年世帯を中心とした家庭菜園研修の実施>

年度当初に2村で約40名(27名、13名)の青少年を対象に家庭菜園研修を実施しました。1村についてはケアボランティア

が研修を受けたことなかったため彼女らも参加しました。その後、JVCおよび2015年度までの活動で育成してきた村内菜園トレーナーがモニタリングとフォローアップ、必要に応じた小規模な研修を続けてきた結果、数名を除くほぼ全員が菜園づくりを継続しています。年末年始に新たな青少年がケア・センターに加え、1村では約30名の青少年がケア・センターの敷地を使って菜園づくりを学びました。現在はボランティアと本事業で育成された村内トレーナーがこれをサポートしています。もう1村については、新しく参加した青少年たちがJVCとして研修を実施する前に、古いメンバーの菜園を真似て自分たちで家庭菜園を作り始めたため、一人ひとりの家庭菜園をモニタリングする中で、改善点などを実践で見せながら方法などを伝えるようにしています。また、新しく家庭菜園を作り始めたケアボランティアたちもサポートにあたっています。

いずれの村でも技術的に課題があるメンバーもまだいるものの、数名を除いて継続しており、何らかの野菜が得られるようになっていきます。

◆成果、課題と今後

現在、約70名の青少年が何らかの形で家庭菜園をつくっています。また、2村いずれにおいても、真似をして自ら菜園を作り始める子どもも数名ですが出てきました。とはいえ、学んだ技術が適切に応用されていない青少年も約半数いるなどまだ課題も残っています。特に、南アフリカでは干ばつが常態化しつつあり、限られた水の有効活用が欠かせませんが、効果的なマルチ(枯れ草で土を覆い、土中の水分の蒸発を防ぐ)や家庭で使用した排水利用など可能な方法も徹底されていないことがあり、年間を通じて外からのサポートなしで栽培するにはまだ時間が必要とされます。ストが終わってからは、モニタリング時に青少年の保護者にも会い、理解や協力を求めるなどして家族でサポートしあえるように工夫をしていますが、これを続けていきます。

(ロ) 生活改善のための家庭菜園づくり

フィアボム村で、将来、村内トレーナーとなれる可能性がある人材が5名ほど育ってきており、彼ら・彼女らを中心に、その他住民も巻き込む形で研修を継続することを予定していましたが、LMCC側の1村と同様、ストの影響で8月まで村に入れませんでした。

9月以降、実践を継続している約20名を対象に、菜園を訪問、モニタリング、フォローアップと必要に応じた研修(いい畝・悪い畝の区別、害虫対策など)を継続しています。

◆成果、課題と今後

フィアボム村では LMCC 活動地域よりストが激しく、住民が村外に出られない日々も続きましたが、そのことで家庭菜園がむしろ現実的な食料確保の唯一の手段となり、継続のモチベーションとなりました。このため、4 月以降一切村を訪問できていませんでしたが、9 月の訪問時には菜園が非常にいい状態に保たれていました。ここでも、村人たちが、これまで学んできたことを活かして、自分たちで成果を出し始めたといえます。また、研修生同士の関係がよく、互いに教え合う、種を交換するなどサポートしあっていることが確認され、それを見た近所の住民が新たに家庭菜園づくりを始めるなど、持続性につながるいい芽が出てきています。こうしたなか、ほぼ目指していた形で村内トレーナーも自力で育ちつつあります。

これを受けて、2017 年度は、モニタリングとフォローアップの頻度を落とし様子を見ていきます。一方で、同様に干ばつの影響が激しいため、LMCC の菜園ファシリテーター、ケアボランティアとともに、Water Harvest(水資源の有効活用方法)についての研修を予定しています。また、LMCC との交流を行なうなどしてモチベーションを継続させていくためのフォローアップを行なう予定です。

(ハ) HIV陽性者を対象としたエイズ治療に関する研修

チルンザナニ活動地域のフィアボム村診療所を拠点に活動する HIV 陽性者サポートグループ(SG)のメンバーの中で、とくに2015年までの研修に参加し、関心を示しているメンバー(約10名)と、別に新しいメンバーを対象に、エイズ治療等に関する研修を実施することとしていました。しかし、年度前半にクリニックでの ARV 配布方法が変わり、陽性者が同じ日にクリニック集まるのがなくなったことから、グループのリーダーと協議し研修実施を断念しました。別の機会に別の場所に集まることで、他の住民から「陽性者」とレッテルを貼られる可能性があるためです。グループメンバー数名から聞き取りを行いそのような意見が出ました。(ロ)の家庭菜園研修の参加者にこのグループメンバーだった陽性者が複数参加しています。こうした方々との関係をつなげながら、今後何らかの活動を行えるか否か様子を見ながら対応していきます。

本年度の活動を受けて

2017年度は、これまでの活動の成果をより確実な方法で定着させることに注力します。このために、まだ課題の残る点に対応した活動に加え、交流等を通じて学びながらモチベーションを継続させられるような活動を行なうことなどを想定しています。特別なインプットよりも、日常的なモニタリング、フォローアップにこれまで以上に力を入れる一年と位置づけられます。

今後ともご支援よろしくお願いいたします。